

9. 金劔宮、ほうらい祭りと地域社会(新町)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4836

9. 金劔宮、ほうらい祭りと地域社会

杉山 悟 志

- I はじめに
- II 金劔宮と鶴来地区
- III ほうらい祭り
- IV 考察

I はじめに

鶴来地区は、この近隣の経済の中心として栄えてきた地区である。また同時に、この地区は、金劔宮という1つの神社の氏子地区でもある。鶴来地区に伝わるほうらい祭りは、この金劔宮の神を祀る行事である。ほうらい祭りは、歴史が古いだけでなく、その規模、盛り上がり方から見ても、鶴来町最大のもので、鶴来町の観光資源の一つでもある。しかし、今なおこの祭りは、金劔宮を中心に行われ、その運営も、鶴来地区に住む人々によって行われている。

また、この祭りは、単に氏神と氏子による宗教的行事とただだけでなく、各町会にとって、鶴来地区にとって、そしてまた鶴来町全体にとって、大きな意味合いを持っている。本稿では、このほうらい祭りというものが、それぞれのレベルの地域社会との関係において、どのような意味を持つものであるのか、検討、考察していくこととする。

II 金劔宮と鶴来地区

金劔宮は、五穀豊饒の神である天津彦穗瓊瓊杵尊（アマツヒコホノニギノミコト）を主祭神とする。その創建は古く、紀元前95年と伝えられており、現在の鶴来地区の源となる集落が、この地に発生したのと時を同じくするものと考えられる。

現在は、金劔宮鶴来地区、という一つの関係しか見られないが、かつては金劔宮の4つの末社が地区内に置かれており、鶴来地区内の町会は、それぞれの末社の氏子として区分されていた。当時の区分は以下の通りである。

上市宮 恵比寿社—今町、新町、上本町、上東町、清沢町

西市宮 大国社—下本町、中本町、古町

大 鳥 社—下東町、知守町、日語町

石切小原日吉社—日吉町

これらの末社は、明治大正期に1町1社体制がしかれるようになって金劔宮に合祀され、現在のような関係になったのである。

境内には、これらの末社だけでなく、河内村下折の神社である粟島神社や、白峰の神社である

丈六神社など山間部の神社も境内神社として置かれている。（『鶴来町保有資源調査』178）

現在は「鶴来」と表記されるこの地域はかつては、「劔」または「劔」と表記されていた。どちらの場合も金劔宮の社名に由来するものであるといわれている。

古くから鶴来地区という広い地区を、氏子として束ねてきた金劔宮であるが、宮司は、専業ではなく、他の職業との兼業である。金劔宮の管理運営は、宮司と氏子総代、各町会から選出される氏子委員によって行われている。

氏子総代は、金劔宮の管理運営の中心となる人々で、総代会は、議決機関である。ほうらい祭りを含む、神社の様々な行事や、建築物の保守管理に関する決定は、総代会によって行われる。鶴来地区の有力者、有識者がこの職に就く。定員は7名で、任期は原則的に3年間であるが、重任も可能であり、特別理由が無い限りは、継続して選出されることが多いため、総代は一般に、ほぼ終身、この職を務めることになる。

氏子委員は、氏子総代による決定を実際に執行する役職である。各町会から選出されるが、選出方法、任期などは、各町会に一任されており、町会長が兼任したり、町会内で推薦されることによって、この職に就く。定員は16名で任期は1年間が基本であるが、神社の修復のための寄付金の徴収といった、1年間での終了が不可能な仕事がある場合は、数年間、継続して、この仕事に就くこととなる。日常的には、庶務、総務、管理の3グループに分けられ、それぞれの活動を行うが、そういった種の日常的な活動よりも、中心となるのは、金劔宮における行事の管理運営である。特にほうらい祭りの前後には頻繁に会合が持たれ、祭り全体に関する話し合いが行われる。また、祭りの当日の、神輿を中心とした行列の指示を出すのも氏子委員の役割である。日常的な事務は、社務所内に置かれた事務局が担当する。現在は、近年定年退職したNさん1名で総代から依頼されて、この職に就いている。Nさんは常時、金劔宮におり、来客の接待等も担当している。

氏子委員のその他の仕事には、先にも触れた、神社の修復のための資金の調達がある。特に近年は、「金劔宮御鎮座二千八十年記念事業」というものが行われている。これは、その名の通り、金劔宮が、この地に創設されてから、2080年目にあたることを記念して行われるもので、本殿の屋根のはり替えや傷みの激しい参道の修理といった内容を含む金劔宮の修復事業である。この事業費は、総額1億円に及び、氏子各世帯からの寄付金を主な財源としている。具体的には、鶴来地区のほぼ全世帯が氏子であるという前提に基づいて、各町会に目標金額が割り振られ、それを町会が、各世帯に割り振り、氏子委員が徴収している。金額は各世帯によって200万円から5000円までと大きな開きが見られ、5～6万円という世帯が一般的である。

祭りの際の金劔宮で行われる神事に参加するのも、氏子総代、氏子委員が中心で、そこに各町会役員が加わる。一般の氏子の神事への積極的参加というのは、あまり見られない。寄付金を集めるためにも、氏子に金劔宮に関心を持ってもらい、もっと足を運んでもらおうと、境内で句会

を催したり、11月にもちまきという行事を行ったりしているが、金劔宮そのものは、あまり氏子である住民の生活には、浸透していないという印象が強い。年始の初詣も、金劔宮だけでなく、足をのばして、白山比咩神社にも行くという人が多いようである。

金劔宮というのは、旧鶴来地区の住民にとっては、地区の氏神として信仰の対象にされている、というより、地区のシンボリックな意味合いの方が強いように思われる。地縁的なつながりを象徴するものである。このことは、特に10月2、3、4日に行われるほうらい祭りの調査において強く認識される。

次の節では、ほうらい祭りと、鶴来地区の人々の関係を中心に述べることにする。

Ⅲ ほうらい祭り

ほうらい祭りは、鶴来地区内で行われる金劔宮の秋祭りである。古くから正式名称は「金劔宮秋季例大祭」という。厳密に言うならば、10月2日に金劔宮で行われるのが、「秋季例大祭」であり、3日と4日に行われる祭り行列は、「秋季例大祭神輿渡御」である。祭りの歴史は古く、約800年前にその原形となるものが始まったとされている。（『鶴来町保有資源調査』146）しかし、「ほうらい祭り」という名称自体はごく最近1970（昭和45）年につけられたものである。それ以前は、住民は単に「秋祭り」とか「金劔宮の秋祭り」と呼んでいた。「ほうらい祭り」という独特の呼称を付けたのは、当時の商工会や、秋祭りの奉賛会である。「ほうらい」というのは、祭りの唄の囃し方の「ヨオ、ホーライ」に由来するがそれに、宝来、蓬来といった縁起の良い意味を重ね、地域の発展の願いを込めたものである。この名称によって、より多くの人に印象付け、祭りに訪れてもらい、祭りを、鶴来地区の観光資源にしようという意図もあったとのことである。（『広報つるぎ』縮刷版下174）

現在、祭りの構成の中心となっているのは、神輿渡御と、その護衛役として地区内の邪気を祓って廻る棒振り（一般に獅子舞と呼ばれるもの）五穀豊饒の神への感謝の意味を込めて作られた、高さ4～5mの武者や娘姿の人形（造り物）の練り歩きの3つである。祭りの原型は、単に金劔宮の神輿渡御として始まったものであり、棒振り、造り物は、後年になって加えられた。

これら、神輿渡御、棒振り、造り物の行列に参加するのは、皆、氏子である鶴来地区の住民である。

神輿の担ぎ手は、輿下と呼ばれるが、これは、鶴来地区の厄年の男性の役割である。それ以外の棒振り、造り物は、人数の関係で、町会ないし複数の町会が合同して一つの単位として出される。その準備は、各町会内の青年団が中心となって行い、当日も青年団が中心となって地区内を巡行することとなる。

準備は、祭りの2週間程前、9月半ば頃から始められる。

棒振りの場合は、練習が夜7時頃から町内の集会所などで行われる。小学校低学年から、高校

生、青年団までの男性と、小学校中学年の女子が集まり、男子は棒振り、女子は囃し方として太鼓の練習を行う。練習開始当初は、あまり、まとまりの無いもので、騒がしい印象もあるが、高校生や青年団員によって、ナギナタや刀といった武具の振り方、視線の方向といった細かいところまでチェックが入れられ、次第に熱気を帯びたものになってくる。夜9時頃になると、一旦練習が終わり、子供達は家へ帰される。その後、青年団員の練習が始まる。青年団員は、子供達の棒振りの相手役となる獅子頭を振るという重要な役割であるため、熱心な練習が夜10時過ぎまで行われる。

造り物を出す場合は、空き地に足場が組まれ、青年団を中心にその製作が行われる。作業開始当初は、あまり人が集まらないが、祭りが近づくにつれ人数は増えていき、祭り前の追い込みの時期には15名前後が集まるという。作業の時には、酒がくみかわされることもあるらしく、作業自体も大きな楽しみの一つとなっているようである。

棒振り、造り物というのは、町会が、その単位となり、祭り当日には、幾つもの棒振り、造り物が出されることとなる。それらの出来映えは、見物人に比較されることとなる。それらの出来が、そのまま、町会の優劣の判断材料となるわけであるから、各町会の取り組みは、真剣なものである。

新町の場合は、造り物、棒振りの準備にかかる費用には、限度額を設定せず、最終的にかかった費用を各世帯から徴収するという方法をとることによって、予算に制限されず、他町会に負けない良いものを作ろうと努めている。

祭り初日10月2日、金劔宮では、例大祭の神事がとり行われる。金劔宮の役員や、各町会の役員、氏子有志が集まり、祝詞の奉上や巫女による舞の奉納といった神事が行われる。通りでは、各家の軒先にシメ縄が飾られ、神輿が立ち寄り、御祓いを行う家には祭壇が設けられている。棒振りは既に始められており、町内の邪気が祓われる。深夜になると、金劔宮本殿から神輿へ御神体に移され、この段階で、神輿渡御の準備は全て整ったこととなる。

10月3日正午、金劔宮前に、造り物、棒振り、獅子等も揃い、発興式が行われ御祓いが行われると、いよいよ巡行の出発となる。

巡行は、鶴来地区を旧役場を中心にカミとシモに分けて、それぞれ1日かけて行われる。カミとシモどちらが先回りになるかは、1年交替とされる。ちなみに、調査を行った1993年度は、カミを先に回った。

神輿には、宮司が同行しており、各町会に数ヶ所設けられた御祓所で、御祓いを行いながら、ゆっくりと進行していく。その後から棒振り、造り物が、氏子委員の指示に従って間隔を保ちながら巡行していく。途中、ハナと呼ばれる祝儀が払われると、その家の前で棒振りを披露することとなる。そのため、さらに間隔は広がり、巡行の列は長く、動きもゆっくりとしたものになる。巡行は、日が沈んでからも続き、夜7時頃に、大通りへと差しかかる。これは、「盛り上がり」

と呼ばれ、祭りが最も盛り上がる時間である。夜10時頃まで巡行が行われ、1日の日程が終了すると、旧役場跡の広場に設けられた御仮舎に神輿は納められる。

4日は、正午にこの役場跡を出発し、残り半分の地区を前日同様に巡行し、夜また大通りで「盛り上がり」が見られる。その後、神輿は、金劔宮境内へと戻され、2日間の神輿渡御は幕を閉じ、深夜、神輿から本殿へ、御神体が返される。

祭り期間中、各家では、様々な料理や酒が用意される。これは、古くからの習わしで、祭りの期間中、この地を訪れる友人知人、親戚が招き入れられ、もてなしを受ける。大変多くの人を訪れるため、祭りの期間中各家の女性は、準備や接待に追われ、祭りを見る暇もないという話も聞かれた。

しかし、ほうらい祭り期間中、鶴来町内では、これに付随して、様々な行事やイベントが行われている。

1993年の場合、10月2日～5日にかけて、獅子吼高原でのパラグライダー大会、2日の石川松任弓道大会、3日の白山の連峰物産展、石川郡剣道大会、放送局と提携したウォークラリー、4日5日の加賀地区ゲートボール大会といったものがそれである。ほかにもほうらい祭り写真コンテスト大会等が実施されている。

これらは皆、鶴来町役場で、町の商工会、観光協会等、鶴来地区をこえた広い範囲の人々の手によって行われている。ある意味で、ほうらい祭りに便乗した行事であるという点が良いだろう。より多くの人にこの祭りの期間中鶴来町へ訪れてもらおうという試みであるとも言える。ほうらい祭りというのは、もはや、鶴来地区の人々によって行われる金劔宮の祭りという側面だけで語る事の出来るものではないのである。

それを具体的に示すものが、ほうらい祭りの町祭化検討の動きである。つまり、ほうらい祭りの運営を、鶴来町行政の手に委ねることによって、より大きな資金や人の手の導入を可能にし、ほうらい祭りを鶴来町全体の行事にしようというのである。実際、造り物や棒振りを行う町会に対しては、行政から補助金が支払われている。ただし、それだけで祭りの運営が可能という程の額ではない。祭りの資金は未だ、大部分が鶴来地区住民の負担である。

ほうらい祭りが、ただ単に、鶴来地区に伝わる行事であるというだけならば、町祭化も問題は無いのだが、この祭りは、金劔宮という氏神と、その氏子によって行われる祭り、つまり、宗教的儀礼という性格を持つために、現在のところ、町祭化されずにいる状態である。先に挙げた棒振りと造り物に対する資金援助も、これらが、金劔宮と直接関係するもので無いという解釈、即ち神輿巡行のみが、金劔宮の神事であると解釈して行われていることである。実際、町祭化される場合も、神輿以外の部分は、金劔宮と何ら関わりのないものとして、鶴来地区以外の人々も参加できるようにしようと検討されているそうである。

IVでは、これらの要素をふまえた上で、金劔宮、ほうらい祭りと、鶴来地区の住民の関係につ

いて考察する。

IV 考 察

IIで見たように、金劔宮、ほうらい祭りとは鶴来地区の関係は、様々な側面を持つ。

第1は、宗教的側面である。金劔宮とその氏子として捉えた場合、ほうらい祭りは神を祀り、神に対する感謝の意を表す儀礼である。しかし、現在の祭りを見る限りでは、このような儀礼の側面は、一般の地区住民にとって、あまり重要視されていない。

そこで考えられるのが、第2の側面、地縁的なつながりを確認し、強化するという、社会的な側面である。既に何度か述べてきたことであるが、ほうらいの主要なイベントである、造り物や棒振りは、鶴来地区の各町会の手によって運営されている。そしてその歴史も古い。ほうらい祭りというのは、年に1度、自分達の町会という一つの共同体の共同作業によって作り上げる祭礼である。他の町会よりもより良い造り物を作り、よりよい棒振りをを行い、他よりも盛り上がることによって、自分達の共同体としての誇りを保ってきたといえる。このほうらい祭りの準備から当日までを通じて、共同体内の人間関係というものが認識され、より強固なものにされてきたのである。また、各町会という範囲に限らず、鶴来地区を一つのまとまりとして見たときも同様のことが言える。鶴来地区は、古くから、山間部と平野部の交流地であり、近隣の経済の中心地であった。祭りのときには、そういった商売関係の知人も、多くこの地を訪れた。そういった人々を家に招き入れ、酒や食事でもてなし、祭りの賑わいを見せることで、他の地区に、真似することの出来ない財力や結束それらを含めた勢いというものを誇示してきたのではないだろうか。経済の中心地としての性格より、金沢のベッドタウンとしての性格が、強くなりつつある現在も、その意識は残されているとあってよい。ほうらい祭りというのは、そういった住民の、町会内、地区内における共同体意識や誇りの発揚の場であり、金劔宮はそのシンボルという面を持っている。

第3に考えられるのは、地区住民の楽しみとして祭りという側面である。祭りの時には、普段は着られないような派手な色彩の衣装を身に付け、顔に化粧をする。日頃から気心の知れた仲間と、通りを練り歩く、酒を飲む。無礼講であるから昔は、喧嘩も多く、女性にちょっとしたイタズラをすることも許されたそうである。ほうらい祭りというのは、喧嘩やイタズラまでも可能にしてしまう非日常的世界、ハレの状態であるといっただろう。この非日常世界が生み出される祭り、というのが地区の住民にとって最も重要な側面である。この楽しみを通して、金劔宮と氏子である自分達の関係、共同体と自分個人の関係が確認され維持されてきたのではないだろうか。楽しみが無ければ、祭りも日常の労役とさして変わりのないものになってしまう。

これらを考慮した場合、鶴来地区において、また、それに属する各町会が統合を維持し、住民が町会や地区への帰属意識を保持し続けてゆく上で、金劔宮、ほうらい祭りというのは、必需不

可欠なものと言える。第二次大戦後、中断していた祭りを住民の手で復活させた、という話からも、そのことが強く感じられる。

しかし、また、最近の祭りは活気が無い、昔はもっと盛大だった、と語る年配の人が多かったのも事実である。昔に比べれば、現在は、TVやラジオといったメディアも発達し、交通の便も良く、他所への移動も簡単である。情報量や行動範囲が拡大したことを考えれば今の若い人々にとっては、地区の祭りというのは、それほど特別なものでは無くなってきているのかもしれない。だが、現在の若い人々も自分達なりに祭りを楽しんでいるし、その重要性も忘れてはいない。過去と比較すれば見劣りのするものなのかもしれないが、祭りを自分達のものとして誇りに思う気持ちは、今なお維持されているという印象を受けた。

Ⅲの終わりで、町祭化について触れたが、その成否は、資金であるとか、宗教的解釈言々といったことよりも、今まで祭りを行ってきた鶴来地区住民の誇りをどのように取り込むかにかかっているのではないだろうか。